

# はじめに

本書は、「大学入学共通テスト」の古文・漢文の対策として演習を行うための問題集です。

実際の大学入学共通テストを想定した問題を収録していますので、本書で演習を重ねることにより、古文・漢文の読解力と大学入学共通テストの設問の解法が自然と身につくように配慮してあります。

この問題集に取り組むことで、大学入学共通テスト対策の第一歩を踏み出しましょう。

\*本書は、二〇二五年二月現在の情報に基づいて編集しています。

## この問題集の構成

古文……10題 駿台予備学校の古文科講師が共同で練り上げたオリジナル問題です。内容・形式ともに大学入学共通テストの傾向を踏まえて作題しています。

漢文……10題 大学入試センター試験および共通一次試験を主に、大学入学共通テストの傾向に合致した入試問題を精選し、さらに改訂・追加を行っています。

問題は難易度によって易から難へ、また大学入学共通テストの傾向がバランス良く出現するように配列されています。できるだけ多くの分野の文章に触れられるよう配慮してありますので、この問題集に取り組むことをとおして古文・漢文の世界への理解が深められ、取り組むほどに力がついていきます。

## この問題集の使い方

① まず、1題15～20分を目標として、問題文を読み、設問に解答する。(問題冊子の最後にマーク解答欄が付いていますので、練習用にコピーして使用してください。)



② 〈答え合わせ〉をする。

③ 時間をかけて、読み直し、考え直す。特に、〈答え合わせ〉の結果、自分が正答できなかったと判明した設問については、自分が気づかなかった〈正答〉の根拠は何か、自分が選んでしまった〈誤答〉のどこに間違いがあるのかを、解説を読む前にもう一度考えてみる。

④ 解説を読む。現代語訳に目を通してきちんと解釈できていなかった箇所をあぶり出し、問題点を解決する。設問の解説を読み、解答の道筋（特に③で考えたこと）について確認し、今後の学習に生かすべきポイントをつかむ。

⑤ 解答に必要な知識（文法・語法・重要単語・重要句形・文学史・古典常識・文章表現についての知識など）を覚える。

⑥ 仕上げとしてもう一度、現代語訳や読み方を熟読し、文章を数回音読する。

⑦ 時間が経ってからもう一度問題を解き直し、きちんとした筋道で解答できるかどうか、知識が身についているかどうかを確認する。

（＊学校の授業や課題として使う場合は、先生の指示に従って下さい。）

## 大学入学共通テスト「古文」「漢文」の出題の特徴

### 【古文】

① 複数テキストによる出題 共通テストでは、ほとんど複数の素材を分析、統合、評価させる問題が出題されます。複数のテキスト（書かれたもの）の素材の組み合わせとしては古文＋古文、古文＋現代文の組み合わせが考えられ、さまざまな形の出題への対応力が試されます。

② 素材 テキストとメタテキスト（あるテキストを言及対象として含むテキスト＝引用・注釈・解説など）の間を行き来する出題となる傾向があります。そのような問題が成り立つためには、学校教科書に採用されるような有名作品とそれと関連する素材が多く出題されることが予想され、教科書的な素材に対してこれまでも深い理解が必要になります。この問題集は比較的有名な作品を素材に含む問題を多めに選び、有名作品についての理解が深まるよう配慮がなされています。

③設問 複数のテキストを見比べながら、選択肢を検討していく設問が柱となります。その設問を成り立たせるために、設問の構成や設問数は一定しなくなる可能性があり、パターンの解法は立てにくくなっていくかもしれません。また、複数テキストの統合・評価に手間がかかる分、選択肢の分量が制限されざるをえず、その結果、**選択肢の抽象度が上がり、センター試験で問われたような解釈・現代語訳には重点が置かれなくなる傾向があります**。本文がきちんと解釈できていなければならぬのは当然ですが、その**解釈を客観的に記述できる力**（文法を語学的に説明する・表現の効果を説明するなどの力）を付けておかねばなりません。

設問の種類については、文法・解釈・説明・和歌の読解・内容合致などの他に、**表現の効果を考えさせる問題・対話（古文中に含まれるもの・設問の選択肢に含まれるもの）を評価させる問題などが出題されます**。

## 【漢文】

漢文の基礎は再読文字・使役などのいわゆる句形と、特別な読みや意味を持つ重要語の理解ですが、共通テストにおいては、こうした基礎的知識の前提のもとに文章全体を読解することが求められます。句形や重要語の知識を身に付けるのはもちろんのことですが、それに満足せず、意識して読解力を養成してゆきましょう。

これまでの出題から考えて、今後の共通テストでも句形や重要語に関わる設問や文章の読解を問う設問に加えて、次のような出題がなされるでしょう。

①複数テキストによる出題 二つ以上の漢文の文章、漢文＋現代文、文章＋漢詩など、様々な組み合わせの**複数のテキストを見渡してそれらの関連性をとらえる力を試す設問**。

②日本語・日本文学と漢詩・漢文の関わりに関する出題 漢詩・漢文に**出典を持つ故事成語**に関する設問や、日本で作られた漢詩・漢文を問題文として、**日本文学史における漢詩・漢文の位置**に関して問う設問。

③対話体による出題 言語生活を意識した、対話体による設問により、対話の内容を読み取り、テキスト全体との関わりを理解することを求める設問。

これらの大学入学共通テストの傾向に対応するためには、できるだけ多くの演習を積んでおく必要があります。本書では、様々なタイプの組み合わせの問題文と、出題が予想される様々な形式の設問を配してありますので、実践的な演習を行うことができます。

目次

古文

10	〔源氏物語〕	76
9	〔新学〕〔新学異見〕	68
8	〔太平記〕	62
7	〔転寝草紙〕	54
6	〔石清水物語〕	46
5	〔明石物語〕	38
4	〔雑談集〕	30
3	〔大鏡〕〔蜻蛉日記〕〔百人一首一夕話〕	22
2	〔東関紀行〕〔西行物語〕	14
1	〔徒然草〕	6

漢文

10	〔論衡〕	140
9	〔春秋左氏伝〕〔史記〕〔十八史略〕	134
8	〔本事詩〕	128
7	〔山陽遺稿〕	122
6	〔初潭集〕	114
5	〔長信宮〕〔唐詩解〕	108
4	〔論語〕〔論語集註〕〔論語古義〕	102
3	〔白鶴堂集〕	96
2	〔近世先哲叢談〕	90
1	〔梁谿漫志〕	84

## 古文 2 『東関紀行』『西行物語』

学習日

/
/
/

次の【文章Ⅰ】は鎌倉時代の紀行文『東関紀行』の二節で、作者が駿河国（現在の静岡県中部）を通過した時の記事である。

【文章Ⅱ】は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて活躍した漂泊の歌人西行の生涯を記した鎌倉時代の物語『西行物語』の一節で、【文章Ⅰ】の内容と関連した箇所である。【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、後の問い（問1～5）に答えよ。（配点 45）

## 【文章Ⅰ】

なほうち過ぐるほどに、ある木陰に石を高く積み上げて、目に立つさまなる塚あり。人に尋ねれば、「梶原が墓」となん答ふ。路の傍らの土となりけりと見ゆるにも、（注2）頭基中納言の口ずさみ給へりけん「年々に春の草の生ひたり」といへる詩、思ひ

出でられて、これもまた、

B

古き塚となりなば名だにも残らじとあはれなり。（注3）羊太傳が跡にはあらねども、心ある旅人は、ここ

にも涙をや落とすらん。かの梶原は、將軍二代の恩にほこり、（注4）武勇三略の名を得たり。傍らに人なくぞ見えける。いかなること

かありけん、かたへの憤り深くして、たちまちに身を滅ぼすきになりければ、ひとまども延びんとや思ひけん、都の方へ馳

せ上りけるほどに、駿河国吉川といふ所にて討たれにけりと聞きしが、さはここにありけりとあはれに思ひ合はせらる。（注6）

（注7）

讃岐の法皇、配所へ赴かせ給ひて、かの志度といふ所にて隠れさせおはしましにける御跡を、西行、修行のついでに見参らせ

て、「よしや君むかしの玉の床とてもかからん後は何にかはせん」と詠めりけるなど承るに、まして、下さまの者のことは申すに及ばねども、さしあたりて見るには、いとあはれにおぼゆ。

あはれにも空にうかれし玉鐙の路の辺にしも名をとどめけり

(注)

1 梶原——梶原景時<sup>かげとき</sup>。鎌倉幕府の重臣で、將軍頼朝<sup>よりとも</sup>・頼家<sup>よりいえ</sup>の二代にわたって重用されたが、正治二年に追討され、駿河国で自害した。

2 顕基中納言——源顕基<sup>みなもと</sup>。平安時代中期の貴族。彼が口ずさんだという「年々に……」は、『白氏文集』に載る詩句「古墓何レノ代ノ人ゾ、姓ト名トラ知ラズ、化シテ路傍ノ土トナリ、年々春草ヲ生ズ」による。

3 羊太傳——中国の晋の羊祜<sup>ようこ</sup>。人徳により敬愛され、死後建てられた碑の前で人々が涙を落としたという。

4 武勇三略——武勇にも優れ、戦略にも秀でていたこと。

5 ひとまど——「ひとまづ」に同じ。

6 吉川——現在の静岡市清水区吉川。

7 讃岐の法皇——崇徳院。平安時代末期の天皇で、退位後、保元<sup>ほうげん</sup>の乱（一一五六）に破れて讃岐国に流され、都に帰還することなく崩御した。死後しばらくして、自分を配流した者への恨みを抱いたまま崩御し、怨霊化したのではないかと恐れられるようになった。

8 志度——現在の香川県さぬき市志度。

## 【文章Ⅱ】

讃岐国に下りつきて、新院(注9)の御ありさま尋ね申すに、(ア)後世の御勤めなどもわたらせ給ひけるよし聞きて、「若人不慎打、以(注10)何修忍辱」と申して、奥に、

**C** 世の中を背くたよりやなからまし憂き折節に君があはずは

新院、はや隠れさせ給ひぬと聞くに、涙もとどまらず。四、五年ばかりありて、讃岐(注11)の松山といふ所に着きて、わたらせ給ひける所を問ふに、跡もなかりければ、

松山の波に流れて寄る舟のやがて空しくなりにつけるかな

昔は、一天四海(注12)を靡なかし、百官万乗(注14)に仰がれ、(イ)いささか天氣に背かず、(ウ)いかにもして竜顔(注13)にも近付き、綸言(注13)をも蒙ら

ばや」などこそありしに、十善の玉の台(注14)を振り捨てて、仏法の名をだに聞かぬ遠き島、深き山中に捨て置き奉ること、あまりの

御いたはしさに、御墓(注15)の前にしばらく侍りて、泣く泣く、

よしや君昔の玉の床とてもなからん後は何にかはせん

(注) 9 新院——崇徳院のこと。

10 若人不慎打、以何修忍辱——崇徳院の供養のための願文の文句で、「もし人が怒りにまかせて打つことがなければ、どうして迫害に耐える行を修めることができようか」という意味。

11 松山——現在の香川県坂出市林田町。崇徳院は配流されてしばらく松山の津の仮の御所に滞在していた。

12 一天四海を靡かし、百官万乗に仰がれ——「一天四海」は全国あるいは全世界の意、「万乗」は天子を指す。

13 綸言——君主が臣下に対していう言葉。

14 十善の玉の台——玉座。

15 御墓——香川県坂出市青海町にある崇徳院の陵墓。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1  
3

(ア) 後世の御勤め

1

- ① 死後の遺産相続に関するご準備  
② 後世に名を残すための歌道のご精進  
③ 来世で極楽往生するための仏道修行  
④ 後に人々を不幸に陥れるためのご祈禱

(イ) いささか天氣に背かず

2

- ① 決して天の意志に異を唱えず  
② あまり時代の趨勢すうせいを気にせず  
③ 少し天皇のご機嫌きげんに迎合して  
④ 少しも天皇のご意向に逆らわず

(ウ) いかにもして

3

- ① どんなにか  
② なんとかして  
③ いずれにしても  
④ どのようにすれば



問2 傍線部A「梶原が墓」とあるが、**【文章Ⅰ】**の作者は梶原景時の墓をみてどう思ったり感じたりしたのか。その説明とし

て最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **4**。

- ① 作者は、梶原景時の墓を見て『白氏文集』の詩句を想起し、将来のこの墓のたたずまいを想像した。
- ② 作者は、顕基中納言の墓所は梶原景時の墓と違って今は誰の墓ともわからなくなっているだろうと想像した。
- ③ 作者は、梶原景時の墓の前で涙を流しているのは、生前の景時の徳に親しく触れた者たちだと考えた。
- ④ 作者は、梶原景時が將軍に対して腹を立て、無謀な謀反を起こして討たれたのは愚かなことだと思った。
- ⑤ 作者は、梶原景時が実際に討たれた場所が世間で言われているとは違っていたことを発見し嬉しく感じた。

問3 傍線部B「古き塚となりなば名だにも残らじ」についての説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ

選べ。解答番号は **5**。

- ① 「なり」は断定の助動詞「なり」の連用形である。
- ② 「な」は完了・強意の助動詞「ぬ」の未然形である。
- ③ 「ば」は順接の仮定条件を表す接続助詞である。
- ④ 「だに」は程度の軽いものをあげて重いものを類推させる意を表す助詞である。
- ⑤ 「じ」は打消推量の助動詞の終止形である。

問4 傍線部C「世の中を背くたよりやなからまし憂き折節に君があはずは」の和歌についての説明として最も適当なものを、

次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 「世の中を背く」は、保元の乱で敗れて流罪に処せられ、世の中から見捨てられたことを表している。
- ② 「や」は反語、「まし」は事実に対する仮定を表しており、「たよりやなからまし」で人生には拠り所などないという意味になる。
- ③ 「憂き折節」は、崇徳院が死後、地獄でひどい責め苦にあうことを予想した表現である。
- ④ この和歌には倒置法が用いられており、出家する契機が得られたのを幸いとすべきだという主張が強調されている。

## 問5

【文章Ⅰ】に紹介された西行の話は、【文章Ⅱ】に述べられたような西行の事績を踏まえていると考えられる。【文章Ⅰ】の作者が梶原景時の墓を見て西行の話を想起したのはどうしてか。【文章Ⅱ】の内容を踏まえたその説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

① 【文章Ⅱ】の「世の中を…」の和歌からうかがえるように、悲運についての憤りを崇徳院が捨て去るよう西行は崇徳院の生前から願っており、「よしや君…」の歌にも崇徳院への同様の願いが含まれている。【文章Ⅰ】の作者は梶原景時に同様の願いを抱き、西行の話を想起したと考えられる。

② 【文章Ⅱ】の「松山の…」の和歌からうかがえるように、西行は崇徳院の悲運から人生のむなしさを感じ取っており、「よしや君…」の歌にも同様の無常観が表されている。【文章Ⅰ】の作者も梶原景時の運命から人生のむなしさを感じ取り、西行の話を想起したと考えられる。

③ 【文章Ⅱ】の「十善の玉の台」と「遠き島、深き山中」の対比からうかがえるように、西行は崇徳院の生涯から人の世の転変の激しさを感じ取っており、「よしや君…」の歌にも同様な人の世の認識が含まれている。【文章Ⅰ】の作者も梶原景時の話から同様の認識に至り、西行の話を想起したと考えられる。

④ 【文章Ⅱ】の「仏法の名をだに聞かぬ」の語句からうかがえるように、西行は崇徳院が浮かばれていないことを恐れており、「よしや君…」の歌には崇徳院の魂を鎮めようという意図が含まれている。【文章Ⅰ】の作者も、梶原景時が同様に浮かばれていないのではないかと考えて、西行の話を想起したと考えられる。

⑤ 【文章Ⅱ】の「遠き島、深き山中」の語からうかがえるように、西行は人里離れた崇徳院の墓を訪ねながら旅の孤独を感じており、「よしや君…」の歌にも旅の孤独がにじみ出ている。【文章Ⅰ】の作者は梶原景時の塚を見て急に強い孤独感に襲われ、その慰めとして西行の話を想起したと考えられる。

古文 2

『東関紀行』『西行物語』

解答・配点

設問	配点	解答番号	正解	自己採点
1	(ア) 5	1	③	
	(イ) 5	2	④	
	(ウ) 5	3	②	
2	8	4	①	
3	7	5	①	
4	7	6	④	
5	8	7	⑤	
小計			45点	

出典

『東関紀行』

鎌倉時代中期——仁治三年（一二四二）冬以降——に成立したと推定される紀行文（二巻）。作者はかつては鴨長明、源光行・親行などとされていたが、現在は未詳とされる。京都東山で隠遁生活を送る五十歳に近い作者が、仁治三年八月十三日に東山を出発し、同二十五日に鎌倉に到着するまでの旅の道中、その後の鎌倉における遊覧、帰京を流麗な和漢混淆文体で記す。旅の目的は記されていないが、故事や古歌がふんだんに引用されており、古来の名所、歌枕を歴訪してその情緒を味わうことに大きな関心があったことは間違いない。『海道記』『十六夜日記』と並んで中世三大紀行の一つとされる。

『西行物語』

平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて活躍した歌人西行（一一一八～一一九〇）の生涯を、遊行・廻国に重点を置き、多数の和歌も交え、虚実を織り交ぜて記した物語（二巻）。『西行一生涯草紙』『西行四季物語』『西

行一代記』『西行記』とも称され、絵巻物の体裁を取るものもある。鎌倉時代中期の成立と推定され、作者は未詳。

現代語訳

【文章Ⅰ】

さらに通り過ぎていくうちに、ある木陰に石を高く積み上げて、目を引く様子の塚がある。人に尋ねると、「梶原（＝梶原景時）の墓」と答える。路傍の土となつてしまったよと見えるにつけても、顕基中納言（＝源顕基）が口ずさんでいらつしやつたとかいう「年々に春の草の生ひたり」といった詩が、自然と思ひ出されて、これもまた、古い塚となつてしまつたならば（墓の主の）名前さえも残らないだろうとしみじみと感慨深い。羊太傳の碑ではないけれども、心ある旅人は、ここでも涙を落としているのだろうか。その梶原は、將軍二代の恩顧を受けて榮え、武勇三略の名声を獲得した。肩を並べる人がないと見えた。（ところが）どういうことがあつたのだろうか、朋輩の憤りが深くて、たちどころに身を滅ぼすことになつてしまつたので、ひとまず落ち延びようと思つたのだろうか、都の方へ馬を走らせて上つていたうちに、駿河国吉川という所で討たれてしまつたと聞いていたが、さては（梶原景時が討たれたのは）ここであつたよとしみじみと感慨深く思ひ合わされる。

讃岐の法皇（＝崇徳院）が、配所へ赴きななさつて、あの志度という所で死亡くになつてしまつた（その崇徳院の）御陵を、西行が、修行の機会に見申し上げて、「よしや君：たとえ昔の（天子の休む）玉の床といつてもこゝなつた（＝亡くなつた）ような後は何にもならないだろう」と詠んでいた話などをうかがいますにつけても、まして、下々の者のことは申すに及びませんけれども、目の当たりに見るにつけては、実にしみじみと悲しく思われる。

あはれにも：悲しいことに、（こんな所で命を落として）中空にあてもなくさまよう魂が路の側の名をとどめたことだなあ。

## 【文章Ⅱ】

讃岐国に到着して、新院（＝崇徳院）のご様子をお尋ね申し上げると、来世のための勤行などもなさっていたということを聞いて、「若人不慎打、以何修忍辱」と（供養の願文を）記し申しあげて、奥に、

世の中を：俗世に背を向けるきつかけがなかったらうか。つらい時期にあなた様がお遭いにならなかったらば。

新院が、すでにお亡くなりになってしまったと聞くと、涙も止まらない。四、五年ほどして、讃岐の松山という所に出掛けて、（崇徳院が）住んでいた所を訪ねたが、跡形もなかったので、

松山の：松山の波に流れて寄って来た舟に乗って崇徳院はこの地に來られたが、その舟が空しく朽ち果てるように、そのまま空しく亡くなってしまったなあ。

昔は、全国を従わせ、百官から天子として仰がれ、「少しも天皇の意向に背かず、何とかしてご尊顔を拝し、綸言をも蒙りたいものだ」などと言われたのに、玉座を捨てて、仏法の名さえも聞かない遠き島、深き山中に捨てて置き申し上げたことが、あまりにおいたわしいので、陵墓の前にしばらくおりまして、泣く泣く、

よしや君：たとえ昔の（天子の休む）玉の床といってもこうなった（＝亡くなった）ような後は何にもならないだろう。

## 《共通テストの傾向に関わる部分》

全体として二つの古文の文章を統合・評価させることを狙った問題とした。問5が複数テキストの統合評価の問題で、【文章Ⅱ】の分析を踏まえて【文章Ⅰ】の文脈を考えさせる問題となっている。

## 設問の解説

問1	正解	(ア)	③	(イ)	④	(ウ)	②	語句解釈の問題
----	----	-----	---	-----	---	-----	---	---------

重要古語や文法・語法の知識が問われるとともに、文脈から語句の意味を推測する力も問われると考えられる。ふだんから、重要古語や文法・語法をまめに調べ、文脈の中で適切な訳を考える習慣をつけてほしい。

(ア) 「後世」は輪廻（＝生まれ変わり）を教義の一つとする仏教に関わる語で、死んで生まれ変わった「あの世・来世」のことである。浄土教ではあの世で極楽往生することが仏道修行の目的だった。「御勤め」の「勤め」は、本来は励むこと・精を出すことを表すが、仏教に関わる文脈では「勤行」（＝仏前で経を上げたり念仏したりして修行に励むこと）・「仏道修行」の意となる。正解は③である。

(イ) 副詞「いささか」は、「いささか―打消」の形で用いられた場合は全部否定を表し、「少しも～ない」などと訳す。呼応の副詞は知識がなくてもある程度は推測できるようにしておきたい。打消呼応の副詞は全部否定が多いことに注意する。名詞「天気」に「天皇のご機嫌・ご意向」の意味があることは覚えておいた方がよいが、崇徳院が、全国を従わせ、百官から天子として仰がれていたことを述べる文脈だから、「天気」の「天」＝「天皇」の「天」の類推が働けば、知識がなくても推測することができよう。正解は④である。

(ウ) 副詞「いかにもして」は、「いかにもして―意志・願望」の形で用いられると、「なんとかして～よう・たい」などと訳す。文末に来ている「ばや」は未然形に接続して自己の希望を表す終助詞（～したいものだ）などと訳す）である。正解は②である。

## 問2

## 正解

## ①

## 内容合致の問題

【文章Ⅰ】の第一段落に述べられた内容を説明した選択肢の正誤を判定する問題である。それぞれの選択肢は本文中に対応箇所があるので、その箇所と選択肢を照合して正誤を判定していく。

①は2～3行目と対応しておりこれが正解である。「思ひ出でられて」とあるように、確かに顕基中納言の口ずさんだ『白氏文集』の詩句を想起しているし、「将来のこの墓のたたずまいを想像した」が、「これもまた、古き塚となりなば名だにも残らじとあはれなり」と対応している。

②は2～3行目と対応しているが、「これもまた、古き塚となりなば名だにも残らじとあはれなり」の「これ」は梶原景時の墓を指しており、「顕基中納言の墓所」は本文中では話題になっていない。③は3～4行目と対応しているが、「生前の景時の徳」は本文中では話題になっていない。④は4～5行目と対応しているが、そこで述べられているのは、朋輩たちが梶原景時に憤り、それが原因となって梶原景時が身を滅ぼすことになったということである。⑤は5～6行目と対応しているが、「さはここにでありけりとあはれに思ひ合はせらる」の部分は、少なくとも「世間で言われているのとは違っていたことを発見し嬉しく感じた」という解釈にはならない。

## 問3

## 正解

## ①

## 文法(品詞分解型)の問題

品詞分解型の文法の問題は付属語の判別がポイントとなる。普段から付属語の接続、活用、意味・用法などについての理解を深めていかなければならない。

傍線部を単語に分解すると、

形客詞 名詞 助詞 助動詞 助詞 名詞 助詞 助詞 助動詞  
古き 塚 と なり な ば 名 だ に も 残 ら じ

となる。①「なり」は格助詞「と」の下に来ている。格助詞「と」(結果)の下に来る「なり」は動詞である(ラ行四段動詞「なる」の連用形)。断定

の助動詞「なり」は名詞や活用語の連体形など、体言として働く語に接続する。格助詞「と」に接続することもあるが、その場合は「と+なり」で「〜」というのである」などと訳せなければならない。ここはそう訳すことはできないので、①の説明は誤っていることになる。正解は②である。

②「な」はラ行四段動詞「なる」の連用形に接続し、下接しているのが順接の仮定条件を表す接続助詞「ば」なので、完了・強意の助動詞「ぬ」の未然形として矛盾は生じない。③「ば」は完了・強意の助動詞「ぬ」の未然形に接続しており、順接の仮定条件を表す接続助詞として問題は生じない。④「だに」には、(1)願望の最小限度を表す用法(「だに+命令・意志・願望・仮定」の形となる)と、(2)程度の軽いものをあげて重いものを類推させる用法とがあるが、下に命令・意志・願望・仮定を表す語句は用いられていないので、(2)の用法と考えられ、説明におかしな点はない。⑤「じ」はラ行四段動詞「残る」の未然形に接続しており、引用文の末尾(下に格助詞「と」が来ている)なので終止形と考えられる。やはり説明におかしな点はない。

## 問4

## 正解

## ④

## 和歌説明の問題

まず、問題の和歌を音数律に従って区切ると、

世の中を―背くたよりや―なからまし―憂き折節に―君があはずは

となる。第三句の末尾の「まし」は反実仮想の助動詞「まし」の連体形で、反語を表す係助詞「や」の結びとなっているので、ここに句点(。 )を打つことができる。これ以外に句点が打てるところはないので、この和歌は三句切れである。結句の末尾の「ずは」は打消の助動詞「ず」の連用形(一説に未然形)に係助詞「は」(接続助詞化して順接の仮定条件を表している)が付いた形で、「〜ないならば」などと訳すことができ、第三句の「まし」と連動して反実仮想の構文を作っている。反実仮想の構文は通常「―仮定条件、―まし」の形となるはずなので、この和歌には倒置法が用いられていることになる。「世の中を背く」は俗世に背を向ける(＝出家する)意、「たより」はここは「きっかけ・機会」などの意、「憂き折節」は「つらい時期」



ぐらいの意味である。以上の分析を踏まえてこの和歌を訳すと、「俗世に背を向けるきっかけがなかったらどうか。つらい時期にあなた様がお遣いにならなかったならば」などとなるが、「つらい時期にあなた様がお遣いになったからこそ、俗世に背を向けるきっかけができた」という事実に基づく表現であることに注意すると、「つらい時期」とは、保元の乱で罪に問われたことを指すとしか考えられないことがわかる。

以上の分析を踏まえて選択肢を吟味すると、①は「世の中を背く」の解釈を、②は「たより」の解釈を、③は「憂き折節」の内容を誤っている。したがって、残った④が正解となる。この和歌を詠んだ西行は僧侶であり、僧侶にとって出家することは悟り、成仏につながる評価すべき事柄である。やはり④には誤った点は含まれていない。

なお、西行は崇徳院の死後の怨霊化を恐れていたらしい。崇徳院の悲運を、出家の機縁として肯定的に捉え、俗世に対する恨み・執着を忘れてほしいという願いがこの和歌にはこめられている。

## 問5 正解

### ⑤ 複数テキストの統合・評価の問題

まず、【文章Ⅰ】で【文章Ⅱ】に述べられたような西行の話が想起された理由を考える。【文章Ⅰ】の作者は梶原景時と崇徳天皇を、生前の地位の高低という違いはあるものの、他の点では近いところがあると考えた。だから、【文章Ⅱ】に述べられたような西行の話を想起したのである。

【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】に述べられているとおり、二人とも周囲から仰がれていたが、不運に見舞われ、鎌倉・都という根拠地から離れた所で非業の死を遂げたという点で共通している。二人とも、「悲運についての憤り」(↓①)を抱いて亡くなっただろうし、そのような二人の人生は、「人の世の転変の激しさ」(↓③)や、「人生のむなしさ」(↓②)を示しているといつてよい。また、【文章Ⅰ】の「あはれにも…」の歌の「空に浮かれし玉銚の」という表現(「玉銚の」の「玉」に「魂」が掛けられており、「中空にあてもなくさまよう魂」の意となる)からうかがえるように、【文章Ⅰ】の

作者は梶原景時が浮かばれていないと感じているが、西行も崇徳院が浮かばれていないと考えていた可能性が高いことが、【文章Ⅱ】(特に「仏法の名をだに聞かぬ」の部分↓仏法で供養されなければ浮かばれない)からわかる(↓④)。受験生の判断を超える部分はあるものの、①～④には誤った点は含まれていない。

一方、⑤は、【文章Ⅱ】の「遠き島、深き山中」を「旅の孤独」の表現と取り、【文章Ⅰ】に、梶原景時の塚を見た際に感じた「強い孤独感」を読み取っているが、【文章Ⅰ】にも【文章Ⅱ】にも、孤独感を表す表現は見出すことができない。正解は⑤である。